

---

# 環境社会主義

ファイアドレイク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

環境社会主義

### 【Nコード】

N0759S

### 【作者名】

ファイアドレイク

### 【あらすじ】

西暦3000年、世界は一つの共同体になっていた。過去の反省から、この世界は環境を大事にしているのだが、その裏にはある権力者達の思惑が潜んでいる。

そんなことも知らない杉岡龍次郎は、少数精鋭の環境研究所の若き所長。嫌な先輩の扱いに苦労しながらも、研究に没頭する日々を送っていた彼がある日見つけたデータは、世界を大きく変えるものであった……

## 第0章 決断（前書き）

環境保護、環境保護と叫ばれる昨今、そういったお題目であれば人々は考えずに食いついている。買い換えずに長く使う方がエコかも知れない。リサイクルで消費するエネルギー量は？そもそもエコって何のため？

すこしでも私のメッセージが届けば、これほど嬉しいことはありません。

## 第0章 決断

何故、こんなものを見つけてしまったのか。私は自問した。そして、それは考えるに値しないと結論付けた。問題は見つけたという『事実』だから。どんな経緯であろうとも、それは今、再び科学者によって見いだされ、その手中にあるのだから。

思想は人そのものである。それは真実を元として生成される。だから人は真実を得るために虚実と戦う。虚実が勝利すれば『人間』は死ぬ。

だがしかし残念なことに、万人のための真実など存在しない。それは、ある人間にとっての真実が、ある人間にとっての虚実であることを意味している。すなわち、他人を認めることは、他人にとっての真実を認めることであり、自らの真実を否定することである。

万人にとっての真実は存在しない。しかし、万人にとっての事実なら存在する。私は決断した。事実を明らかにすると、それが指し示す真実を判断するのは……世界に任せよう。

## 第0章 決断（後書き）

不定期な連載になるとは思いますが、皆様よろしくお願いします。

## 第1章 些細ないざいぜ

単調な目覚まし時計の音で目が覚める。片手で止め、いつものように朝の支度をする。自動車に乗って研究所に向かうが、途中で水素が足りないことに気づき、水素スタンドで補充する。駐車場に車を止めた時、友子の声がした。

「おはよう」

馴れ馴れしい挨拶ではない。公私混同はしないと、お互いに決めているからだ。そのおかげで、今はまだ山田にも気づかれずに済んでいる。噂をすれば影、とはよく言ったもので、研究所に入ったとたん山田が声をかけてきた。

「所長、今日の議題はなんでしたっけ？」

『所長』という言葉に皮肉を感じ取れた。まあいつものことだ。どうやら、自分よりも十歳以上も若い私が所長になって不服らしい。聞く話だと、もし私が居なければ彼が所長になっていたとか。想像したくもない。

「所長、どう致しましたか？」

山田は嫌な奴だが、馬鹿ではない。今日の議題だつて知っているに決まっている。恐らく、私が答えられなかったら陰で馬鹿にするつもりなのだろう。

「今日の議題は、水素の確保状況についてと、ブラックホール発電における送電の効率化についてだ」

山田と歩きながら話している内に、会議室に着いた。他の研究員は全員準備が出来ているようだ。友子の姿も見える。

「今から、エネルギー源についての会議を始める。まずは、水素の確保状況についてだ。友広研究員、とりあえず百年分の目星はついたか？」

会議は順調に進んだ。水素はひとまずの目標としていた百年分の確保が終わり、まだまだ生産できるし、ブラックホール発電の送電

効率は従来に比べて飛躍的に上昇した。何も問題になるようなものは無かった。会議を閉会しようとしたその時

「所長、少しお耳に入りたい話があるのですが。」

山田が声をかけてきた。全く、めんどくさいやつだ。

「それは会議に関係のあることか？」

「この研究所に関係あることです。最近、我々が……」

聞き飽きた。どうせ陰謀論が流行っているというお決まりのネタだ。根も葉もない噂など、目立つものには付き物だというのに。

「閉会！」

「所長？」

「その話は聞き飽きた。どうせ根も葉もない噂だ……警告しておく。これ以上そんなことを吹聴すれば、私は君を首にする」

久しぶりに、自分の本音を吐き出したような気がする……それもかなり強い口調で。まあいい。たまにはこういう事も必要だ。所長としてのリーダーシップを発揮するためにも、な。これでいい、と自分に言い聞かせて、私は会議室を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0759s/>

---

環境社会主義

2011年10月8日07時10分発行